教祖百四十年祭

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

打てば響く句

ご本部では３年ぶりにお節会が開かれた

明治13年、中川文吉氏は、初めておぢば帰りをした際に教祖と力比べをしています。文吉が教祖のお手首を力いっぱい握ると、教祖がお握りになった自分の手首が折れるかと思うほどの痛さを感じました。教祖は、

「子供の方から力を入れて来たら、親も力を入れてやらにゃならん。これが天理や。」

と仰せになりました。

年祭活動1年目の目標として、大教会では教えの実践に「動く」ことを申し合わせています。この3年間、思い通りに動けなかった分、どんなことからでも動き始めることが大切です。教会に足を運ぶ、身近なところでひのきしんをする、本部や教会の行事や活動に参加する。たとえ身体が不自由でも、言葉や態度で周囲の人を喜ばせることもできるでしょう。

教祖年祭の旬は、動けば動くだけ喜びを感じることができる、まさに「打てば響く句」。力を入れれば入れるほど、神様もしっかりと返してくださいますが、まずは私たちが身体と心を動かさなければ、喜びは見えてきません。今年一年、身近なところから「動く」ことで、喜びの多い一年を送りたいと思います。

3月30日（木）午前10時
第51回少年会芦津団総会
於・大教会

四方正面

あるとき教祖は、「負ける者は勝つのや、勝つのは負けるのや」と仰せられ、細いひもで輪を拵（こしら）え、首と首で引き合いをさせられた。引き勝った者は先に仰向けになり倒れた。「勝った者は先に倒れるのや、負けた者はその上になるのや」と諭されたという。

また、ある先人は「負けた」は「蒔けた」で、蒔けたら芽が生える。「勝った」は「刈った」で、刈った後には何も残らないと仕込まれたと聞く。

誰しも人の意見や忠告は素直に聞き入れにくく、つい反発してしまう。

負けるとは、低い心をつくること。低い心に理は流れる。年祭活動に向け、陽気ぐらしへの新しい芽をお見せいただきたいと、「負けて通る」と心に誓って1年が経つ。まだまだ高慢な自分の癖性分を戒めつつ、低い心で種子を蒔いていきたい。

（西）

芦津大教会 教祖百四十年祭活動の方針と目標

年祭活動の方針

今なお御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂けるよう、三年千日と仕切って教えを実践し、たすけ一条に真実を尽くして、成人の道を明るく勇んで進ませていただこう。

◎おつとめの勤修とおさづけの取り次ぎ

・日々に頂戴する御守護に心からお礼申し上げ、世の治まりと人々のたすかりを真剣に願って、おつとめを勤めよう。

・病む人には機を逃さずに、真心を込めておさづけを取り次ごう。

◎人をたすけ、人を育てる（おたすけと丹精）

・周囲に信仰の喜びを伝え、自分にできるおたすけをさせていただこう。

・足を運び、心を通わせ、親身の世話取りをして、きめ細やかに丹精しよう。

・次の世代に信仰をつなぎ、その育成に力を入れよう。

◎ひのきしんと伏せ込み

・毎日の生活の中でひのきしんを心がけ、ご恩報じの日々を通ろう。

・おぢばに心をつないで真実を伏せ込み、教会に足を運んで親のご用を担おう。

年祭活動１年目の目標

年祭活動の歩み出しの１年目は、教えの実践に「動く」ことを目標に、年祭活動を力強く踏み出そう。

〈特に推し進める信仰実践〉

・日々の理の実践

・おぢば帰りと教会参拝（日参）の励行

・お願いづとめを芯におたすけの実行

年祭活動のお願いづとめについて

大教会におきまして、国々所々で教会長・ようぼくが取り次ぐおさづけの上に、事分けておたすけの御守護を願うお願いづとめを、１月 25 日より教祖百四十年祭まで三年千日と仕切ってつとめさせていただきます。併せて特別に願い出られた方には名前をあげて格別なる御守護を頂けるようお願いをさせていただきます。

おたすけにかかられる方を下記の方法で大教会へご連絡ください。心一つにおたすけに勇ませていただきましょう。

開始日　立教 186 年 1 月 25 日より

時　間　午前 10 時

願出方法　「お願いづとめ願」に記入の上、下記のいずれかにてご連絡ください

１、FAX　大教会 FAX 番号　06-6700-1854

２、電話連絡　大教会電話番号　06-6702-1980

３、郵送　〒546-0003　大阪市東住吉区今川８丁目 6-32
天理教芦津大教会「お願いづとめ願在中」

４、メール　メールアドレス　otasuke140@ashitsu.or.jp

○電話・メールで連絡の場合、①教会名、②氏名、③ふりがな、④年齢、⑤身上・事情の区別、⑥何日願、を必ずご連絡ください。ご連絡いただいた方の教会名・氏名・年齢を、事分けて祭文にて奏上し、勤めさせていただきます。

※前日の午後９時までに連格いただいた方を、翌日の祭文に奏上させていただきます。
※直接おさづけを取り次がなくても、身上や事情の御守護を願い出てください。

年祭活動１年目は、「動く」一年としたい。日々の暮らしの中で、お互いお与え頂く持ち場、立場、徳分を活かして、何をすれば御存命の教祖にご安心頂き、お喜び頂けるかを思案し、行動につなげていきましょう。

思っているだけ、考えているだけにとどまらず、しようと思うこと、心に決めたことを、「まず動く」「とにかく動く」と、日々自ら積極的に動くことが、様々な気づきや新しい人とのつながりを生み、新たなおたすけへとつながっていくのです。

お互い一人ひとりの動きを通しての「日々の理の実践」が、新たな人の「おぢば帰り、教会の参拝」につながり、「おたすけ」の輪が広がっていくように、陽気に心勇んで年祭活動に取り組みましょう。

《立教185年12月月次祭　挨拶》

教祖にお喜びいただけるよう心を定めて動く一年に

大教会長　井筒梅夫

皆様方には日頃から道の御用の上に真心込めてご丹精くださいまして、誠にありがとうございます。只今は、この一年に賜りました親神様の御守護と教祖の親心に共にお礼を申し上げて、12月の月次祭を滞りなく、結構に勤めさせていただきました。

さて、年祭活動が始まれば、すぐに動き出す心構えを持たせていただきたいと、今年はそのための心づくりと理づくりを申し合わせて通ってまいりました。そして、秋季大祭には真柱様より「諭達第四号」をご発布いただき、これを受けて各大教会では本部巡教が順次行われて、今は全教挙げて年祭活動を迎えるための態勢を整えている最中であります。

諭達で、教祖の親心にお応えさせていただくことが年祭を勤める意義とお示しくださいました。ひながたの道五十年で教祖が人々をこの道に引き寄せられ、おたすけをされ、お育てになられた親心は、『稿本教祖伝』や『逸話篇』、また梅治郎初代様のように、教祖に直接導かれた先人方の伝記や口伝、教会史などからも知ることができます。そして、姿ある限りおつとめの実行を躊躇するだろうと、皆が安心してつとめ一条に通れるようにとの親心から、さらには、親神様の思召通りの神一条の道を進んでほしいと、子供の成人を促されて、教祖は現身を隠されました。これが年祭の元一日の親心です。この親心に感謝して、三年千日と仕切って成人に努めるのが年祭活動です。

ひながたの道は私たちが道を通るお手本ですが、実際は四六時中、寝ても覚めてもというのは難しい。だから、せめて十年の中の三年を仕切って通ってくれ、と親神様は仰るわけです。これが三年千日と仕切る意味です。私たちがこの三年千日を通る上で最も大切な心根の一つが、御存命の教祖の親心にお護りいただき、お導きいただいているという事実を心から離さないこと、教祖を決して見失わないことです。教祖さえ見失わなければ、間違いのない道を通ることができます。この道を通る中には、迷うことや岐路に立つこと、決断を迫られるときがあります。そんなときは「教祖ならどうお考えになるだろうか、教祖ならどうなさるだろうか」との思案に立って行動に移すことが肝心です。

年祭活動に臨むにあたっては、しっかりと心を定めることを疎かにしてはなりません。「教祖の親心にいかにしてお応えすればよいのか、私には何ができるのか」をよく思案して、これを心に定めて３年間やり続けることです。これが一人ひとりの教祖百四十年祭になり、私の年祭活動になるのです。殊に、今ご自身のことや家庭のこと、教会のことで悩んでいたり、困難を抱えているのであれば、その御守護を真剣にお願い申し上げ、お受け取りいただけるだけの心定めをして、３年間やり続ければ、教祖が御存命の理をもって必ずより良き御守護へとお導きくださるに違いないと思います。これがこの人にとっての年祭活動になるのです。

ところで、三年千日はどこから数えるのかという問題がありま

すが、年が明けてすぐという人もいれば、中には諭達を頂いたときから始まると考えている人もいるようですし、その捉え方はさまざまなのかもしれません。厳密にこうだとは言えませんが、社会も世間もお道もやはりコロナの影響でなかなかスタートが切れていません。ですから、私はこの度の教祖百四十年祭に関しては、来年の春季大祭、つまり立教186年1月26日から丸三年と考えていいんじゃないかと思います。それまでは心定めの期間と考えて、そしてこれが私の年祭活動だと心を定めて三年千日を迎えたいと思います。皆さん方もどうか、一人ひとりが自分の教祖百四十年祭、私の年祭活動を固く心に定めて、共に三年千日を踏み出させていただきましょう。

年祭活動の1年目は「動く」ということを常に意識しましょう。ここ数年間はコロナ禍の影響で、世界中の人々がさまざまな自粛や規制を経験しましたが、私たちも信仰活動に規制を掛けざるを得ない場面が多々ありました。

そうした中で年祭活動は始まります。教祖がお働きくださる成人の旬、たすけの旬という素晴らしい時旬を迎えるときに、ジッとしていては何も始まりませんし、動かなければ何も変わりません。御存命でお働きくださる教祖にご安心いただき、お喜びいただくことを常に心の指針として、年祭活動1年目を心勇んで動き、心勇んで働かせていただきましょう。

皆様方には、この一年間お道の上に、そして大教会の上に、それぞれの教会の上に精いっぱいご丹精をくださいまして、誠にご苦労様でございました。

（要約）

立教百八十五年　十二月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には限りない御守護と自由のお導きのまに〳〵日々恙なく結構にお連れ通り下さいます中に、今日は早くも立教百八十五年の納めの月次祭を勤める日柄と相成りました。思い返せば、今年は教祖百四十年祭活動を翌年に控えて、三年千日に臨む心構えを確と持たせて頂くべく、心づくりと理づくりを申し合わせて、お与え頂く持ち場の勤めに励み、一層の成人を誓って時旬の歩みを進めてまいりましたが、遅々たる歩みにて成果も思うにまかせず、数々の至らぬ処がございましたが、その中にも温かい親心にお励ましを頂き、日に月に結構を頂戴して、今年も恙なくお連れ通り下さいました、言い尽くせぬ御厚恩の程は、思えば誠に勿体なき限りでございます。茲に過ぎし一年を顧みて、私共を懐深くお抱え下さる親心に御礼申し上げ、今後の弛むことなきたすけ一条の実践をお誓い申し上げて、只今より役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、十二月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、年の瀬も厭わず参らせて頂きました眞明芦津の道の子供達が、共にお歌を唱和し、同じ思いに御礼申し上げる真心の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

明けて来年は、教祖百四十年祭への年祭活動三年千日の第一年目の年を迎えさせて頂きます。私共をはじめ、教会長、ようぼく一同は、諭達第四号にこもる真柱様のお心をしっかりと汲み取らせて頂いて、教祖にご安心頂きお喜び頂けるよう、時旬の御用に真実込めて動き働かせて頂く決心でございます。何卒この心定めをおおらかな御心にお受け取り下さいまして、温かき親心にお導きを頂き、時旬に相応しいたすけ一条の道をお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへの道の進展を御守護下さいますよう御願い申し上げます。茲に立教百八十五年納めの月次祭に当たり、今年一年にお掛け下さいました御厚恩に重ねて御礼申し上げ、併せて来年も変わりなくお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《立教185年12月月次祭　神殿講話》

どんな困難な中も御守護に感謝して通ることはできる

役員　瀧本庄司

年が明けるといよいよ教祖百四十年祭に向かう三年千日の年祭活動が始まります。

「論達第四号」に「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標（めじるし）に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである」とあり、「五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条（ひとすじ）の道である」ともお示しくださっていますように、教祖のひながたを通らせていただくことがこの年祭活動の芯になります。

しかし中には、分かっていても「ひながた」というと難しいように感じる方がおられるかもしれません。

三代真柱様も、「教祖は、ひながたをたどるということは、何にも難しくないと仰せくださっており ますが、今の時代に生まれ、恵まれた環境にいながら、そして今の感覚を持った私達からすると、やはり、日常の生活でひながたからはずれることが多いと思いますし、簡単なことではないと思います」とお話しくだされたことがあります。

ひながたを通るためには、ひながたを知らなければ通れませんので、仕事の関係でなかなか時間がとれずに、『教祖伝』や『教祖伝逸話篇』に親しむ機会が少ない方は、そのうち時間のあるときにと、先延ばしになってしまうこともあるかもしれません。もちろん自分に都合のいいひながたをつくってしまわないためにも、親しませていただくことは大切です。しかし、論達には、今すぐにでも取りかかれるひながたの核心部分が示されています。

それは、教祖は「どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された」、そして「どんな中でも親神様の大いなる御守護に感謝して通ることを教えられ」とあり、「成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいである」とあります。これが教祖のひながたを通る上で最も大切な部分ではないかと思います。

どんな中も親神様の御守護に感謝して、「ありがたいなあ、結構やなあ」と喜び勇んで通らせてもらえるのが教祖のひながたの大切なところであり、この道の信仰の素晴らしいところだと思います。

これは道専務でなくても、教理の勉強が足りなくても、忙しく働いていても、また入院してベッドの上にいても、誰でも今から取りかかれるものだと思うのです。

苦しむ姿を前にすると

これは今から12年前の話です。12月18日の月次祭の朝、東京に住んでいる地元の同級生Aさんから、正月に開かれる同窓会の案内はがきが届いたとの連絡がありました。

「同窓会の案内状、届いたよ。ありがとう。でも、実はがんの疑いがあって、検査のために千葉のがんセンターに入院していて、正月は帰れそうにないから皆によろしく言っておいて」とのことでした。

私は、がんの疑いだけで入院なんてするのかなと思いながらも、「分かった、伝えておくわ。それと今日は教会のお祭りの日やから、神様にお願いをさせてもらうわな」と言って電話を切りました。そして月次祭で真剣にお願いをさせてもらいました。

しかし彼の言葉が気になって、このまま年は越せないと思い、年末の12月27日に思い切って連絡もせず、彼の入院している千葉まで行きました。

病室に入ると、突然来た私にびっくりした彼の姿は、以前の面影がないくらいに顔が腫れ、髪の毛は抜け、ベッドは赤く染まったテ

ィッシュで埋まっていました。

ショックを受けた私は「どうしたんや」と尋ねると、「実は扁平上皮がんになって、抗がん剤と放射線治療をしてて、治療がきつくて口内炎ができて物は食べられないし、鼻血も止まらないから、この状態やねん」と言うのです。

そして彼の奥さんが私を病室の外に連れ出して「実はすでにステージ4で余命3カ月と言われてるんです。なんとか助けてください」と泣き出しました。私は「分かりました。何とかたすかってもらえるように神様にお願いします」と

言って病室に戻りました。

しかし、彼は未信者なので、健康な私が、死に直面した彼にどんな話をしてもきれいごとにしか聞こえないのではないかと悩み、結局神様の話をせずにおさづけを取り次ぎ、御供米（ごくまい）を渡して帰ってきました。

それからは、本当に彼のことばかり考えていました。年が明けてすぐに、今度こそ神様の話をしようと思って千葉に行ったのですが、やはり彼の苦しむ姿を前にしたら何も話せなくなり、またおさづけを取り次いで、神様のお下がりのお水を置くだけで帰ってきました。

お願いづとめと心定め

悶々と過ごす日々が続いていたとき、大教会の春季大祭で大教会長様が、教祖百三十年祭の旬を見据えて、「1月末から大教会で身上者のお願いづとめを毎日勤めさせていただく」とお話しくださいました。それを聞いて私は「親が手を差し伸べてくれた。これにすがるしかない」と思い、すぐに彼の名前と病状を書いて、お願いづとめを申し出て、教会でも3日間、お願いづとめを勤めました。

しかし、本人の知らないところで黙ってするのではなくて、彼にきちんとお願いづとめをしていることを伝えたほうがいいのではないか。神様の話ができなくても、彼にそのことを伝えに行こうと思い、3日目のお願いづとめを終えて、また千葉に飛びました。

病室に行くと、今まで以上に顔が真っ赤に腫れあがり、身体の衰弱した彼の姿に愕然としました。

彼が「せっかく来てもらったけど、今までで最悪の苦しさで、もう痛くて痛くてどうしようもない。放射線治療のせいで口の中も血だらけで物も食べられず、しゃべるのもつらい」と言うので、「今日はしゃべらなくていいから耳だけ貸してくれ」と言って、初めて神様の話を取り次ぎ、今大教会と教会でお願いづとめをしていることを伝えました。そして、心定めも大切だということを話して、私も彼のために心定めをしていることを伝えると、「もし元気になって命をもらえたら、お前みたいに人のためにこの身体を使わせてもらう」と神様に心定めをしてくれました。それからおさづけを取り次いで帰ってきました。

すると、次の日に彼からこんなメールが届きました。

「何度も、こんな私のため、さぞ忙しいのに、ありがとうございました。来院の夜、CTの写真を見ながら医師から説明があり、局部のがんの陰がなくなっていました。周りの炎症と抗がん剤と放射線治療の副作用の経過を見ながらで、まだ安心は禁物だが少しホッとしています。ほんまありがとう。いつになるかまだ分からんけど、自分自身、心から天理様にお礼を言いたいので、神様に会わせてください。お願いしときます。庄司にも改めて、お礼申し上げます」と。嬉しくて嬉しくてすぐに神殿にお礼に行きました。

それから2週間後の2月17日、彼から退院したとのメールが届き、3月10日に彼に会いに東京に行き

ました。

彼は、抗がん剤の影響はありますが、元気に外に出歩けるようになっていました。その彼が「たすけてもらった俺は、何をさせてもらったらいい？　遠慮なく言ってくれ」と言うので、私は「俺がお前に取り次いだおさづけを取り次げるおたすけ人になってもらいたい。そのためには天理に行って神様の話を９回聞く必要があるけど、お願いしていいか？」と言うと、「分かった。健康なお前よりがんがたすかった俺が言ったほうが説得力あるしな」と笑いながら了解してくれました。

命があるだけで幸せ

そしてその翌日、12年前の３月11日、東北で未曾有の大震災がありました。

その災害から数日して、東京では買い占めが始まって店には何もない状態との報道を見て、東京にいる彼に何か送ってあげなければとの思いから電話をしました。

「東京は今、何もないって聞いたけど、足らないものがあったら遠慮なく言ってくれ」と言うと、彼が「何を言うてるねん。俺は命がある。それだけで十分幸せや。小さな子供でもいたら必死に食料を探すやろうけど、俺は夫婦２人だけや。食料がなくても、お米が少しあったらなんとでもしのげる。トイレットペーパーがなくても、今はありがたいことにお尻を洗ってくれる。だからハンカチを使って拭いたらええねん。

何か足らないほうが、当たり前にあった物のありがたみが分かる。東北の被災者は何もない。家を失った人たちは、命があると喜んでいる。家族と再会した者は、私には家族がある。おにぎりの配給が１個あったら、今日は食べるおにぎりがある。あるものを探して、ある、ある、あると必死で喜びを見付ける毎日を送っている。

それに比べて東京は何もかも揃っているのに、ない、ない、ないと買い占めに走る。なくした者、何もない者の方が喜びに敏感になっている。俺もそう、ないはずの命が今はある。それだけですごく充実しているし、幸せや。だから心配いらん」と話してくれました。

私は「余計なこと言ってすまなかった」と謝りました。このやりとりを、そばで聞いていた前会長に説明すると、「すごいな。だから彼はない命がたすかったんやな。どんな中でも神様の御恩を感じて喜べるその心に神様が働いてくださったんや。これこそがたすかる道なんや」と感心していました。

当たり前がありがたい。命があるだけで幸せなんだということを、彼は自分の病気や震災を経験して身をもって実感しているのです。病気だけではなく、彼は心もたすかっているんだなと思いました。

とのよふな事をするのも月日にわたすけたいとの一ちよはかりで

十二号　78

と、あらゆる節は親神様のたすけてやりたいとの親心の現れであると教えていただくのです。

ひながたの実践

教祖は貧のどん底の道中、食べるに米のない日を過ごされる中、

「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」

『稿本天理教教祖伝』40頁

と子供さんたちを励ましておられます。

教祖は、かしもの・かりもののありがたさを感じることで、どんな中でも、心一つで喜べることを、このひながたで教えてくださったのです。私たちお道を信仰する者は、体験せずとも、教祖のひながたでそう教えていただいているはずです。

彼はお道の教え、教祖のひながたは全く知りませんが、身上と大震災を通して、身をもって当たり前のありがたさを知ったのです。

そして、彼は約束通りおぢばにお礼にきて、夫婦で別席を運んでくれました。

彼のように教理を勉強していな

くても、どんな困難な中も、心明るく親神様の大いなる御守護に感謝して通ることはできるのです。それがひながたの核心部分でもあると思うのです。

どんな中でも「ありがたいなあ、結構やなあ」と通るのは、今からでもすぐに始められます。まずはそこから教祖のひながたを実践してみてはいかがでしょうか。

そして、1月25日から大教会でお願いづとめが始まります。おたすけにかかられる方は、どうか親が差し伸べてくださる手をしっかりとつかんでください。必ず不思議鮮やかな御守護が頂けるはずです。

結構を頂戴して

前真柱様は、「貧に落ちきるというのは、風呂に入る時に服を脱ぐようなもので、あくまでも風呂に入る為の手段であって、裸になるという事も貧に落ちきるということも、信仰の目的ではないのです。目的はあくまでも陽気ぐらしを味わう事である」とお話しくださいました。

要するに、教祖は人だすけのために貧に落ち切られたのです。そして、「信仰が初代の方ならともかく、二代三代以来の者には、初代以来の、伏せ込みのおかげで、自分の持ち物を手放しても手放しても、どん底に落ちきりにくい程の与えを頂戴している」ともお話しくださいました。

私たちは親々が伏せ込んでくださったお徳のお陰で、脱いでも脱いでも脱ぎ切れないほどの結構を頂戴しているのです。

年が明けて、来月は三年千日の年祭が始まるスタートの春季大祭です。仕切り月でございます。

親々のお陰で、手放しても手放してもなかなか貧に落ち切ることはできません。ならば、せめて年祭活動が始まる前に、今あるものを思い切って手放して、陽気ぐらしを味わうために、そして人だすけのために、来月は仕切っておぢばに運ばせていただきましょう。

（要旨）

十二月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扈者	加世田洋
指図方	奥田正徳	賛者	梶川芳征
献饌長	井筒文夫	伝供	在籍者一同

	扈者	賛者
	竹内義忠	木村真次

	てをどり	地方	笛	琴
座りづとめ	大教会長 瀧本眞二郎	井筒文夫 井筒敏成	山田道弘 岡島秀男	奥田富美子 井筒ちぐさ
	岩切正教 会長夫人	山本義範	湯川正圀	浜田たつゑ
前半	今川和子 前会長夫人	川畑澄博 河端芳雄	今川政治 守田清一	瀧本基志枝 梶川りよ子
	岩切正義 梶川和隆	中村俊和	奥田眞治	松本さだえ
後半	立花善三 宗我邦代	岡本久昭 今川聖一	山田道弘 梶川芳男	湯川照代 西本美智恵
	樋川泰士 西本興正	瀧本亘	梶川和人 花岡忠和	竹内淳子
	湯川正信 加世田陽子		西本義之 浜田宣郎	
	岩切孝子 木村理恵		奥田正儀 榎康紀	
	松森明美 石川石美		立花善文 石川健郎	

	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	三味線	胡弓
座りづとめ	山田道弘	岡島秀男	湯川正圀	今川政治	守田清一	奥田富美子	井筒ちぐさ
前半	梶川芳男	西本義之	浜田宣郎	立花善文	石川健郎	瀧本基志枝	梶川りよ子
後半	梶川和人	花岡忠和	奥田正儀	榎康紀	河合善洋	湯川照代	西本美智恵

餅つきひのきしん、お節会

昨年12月27日、詰所で餅つきひのきしんが行われた。

コロナ禍になってから中止となっていたお節会が今年再開されるため、ご本部元旦祭にお供えするお餅もコロナ禍以前の数に戻り、各教会から老若男女問わず約100名が参加し、杵と臼を使用して、賑やかに勇ましくつき上げた。

また1月5日から7日まで、ご本部でお節会が3年振りに開催。各会場では、同じ方向を向いて食べる、お代わりを取りやめるなど、感染症対策が講じられた。芦津からも多くの教会がおぢばに帰参し、喜びの声が聞かれた。

天理高校ラグビー部　大教会から花園へ

天理高校ラグビー部が４年ぶりに全国大会に出場するにあたり、昨年12月27日から選手やチーム関係者合わせて47名を大教会で受け入れた。

期間中は、専属の管理栄養士からのメニューに従い、食事を提供しつつ、大教会からも一品付け加えて選手たちの栄養管理に努めた。

また試合中に負傷して病院に運ばれた選手の無事と早期回復を願って、チームと大教会在住者全員でお願いづとめを勤めた。

天理高校は惜しくも準決勝で敗れたが、力いっぱい戦い抜いた選手たちを心から讃えたい。

立教百八十六年　元旦祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の果てしなき親心と御守護により、茲に芽出度く立教百八十六年の新春を迎えさせて頂き、一同慎んで寿ぎと共に御礼申し上げます。顧みますれば過ぎし一年、コロナ禍の収まり切らぬ中にあって、教祖百四十年祭活動に臨む心構えをしっかりと持たせて頂くべく、心づくりと理づくりを申し合わせて、届かぬながらも心の成人に努め励ませて頂きましたが、大いなる親心にお抱え頂き、数々の御守護を賜りまして、恙なく結構にお連れ通り頂きましたことは、誠に有難く勿体ない極みでございます。元旦に当たり、言改めて御厚恩を御礼申し上げ、併せて今年も変わりなくお導き頂けますよう御願い申し上げたいと、只今から役目にあずかる者一同、勇み心を揃え、今年の初づとめを陽気に勤めて、元旦祭を執り行わせて頂きます。御前には年の明けるのを待ちかねて参らせて頂きました芦津に繋がる道の子供達が、共に恙なき一年の御守護を願い、一層の成人を誓ってお歌を唱和する真心の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ教会長、ようぼく一同は、改まる年と共に決意も新たに教祖百四十年祭に向かう旬に相応しい成人を求めて、諭達第四号に思し召される道の親の御心にどこまでも沿い切らせて頂いて、御存命の教祖にご安心頂きお喜び頂けるよう、年祭活動一年目の時旬の務めに、一手一つに勇んで動き働かせて頂く決心でございます。

何卒この心定めを大らかな御心にお受け取り下さいまして、今年も一年、温かき親心と十全の理にお護り下さり、教祖年祭の旬の理を頂いて、各々の教会に結構な理をお見せ頂き、銘々は成人の道をお導き下さいまして、心勇んだ時旬の歩みを御守護下さいますよう、年の始めの御礼に併せ、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

修養科を修えて《975期》

夫婦揃ってひのきしん

奄美笠分教会
福崎 久男　78歳

令和4年3月1日、私は脳梗塞で緊急入院しました。入院中に脳内出血を起こし、右半身麻痺と言葉を話せなくなりました。医師からは、「血の塊が右半身を動かす神経を圧迫している。塊が小さくなると、動くようになる可能性も有りますが、完全に元には戻らないでしょう」と言われました。「動くようになる可能性も有る」との一言に、妻は「親神様にたすけていただいた」と思い、毎日十二下りのお願いづとめを勤め、修養科の心定めをしたようです。

お蔭で御守護を頂き、言葉も片言ですが話せるようになり、妻に電話をすると、「一緒に修養科に行きましょう」と言われました。妻は親からの信仰で、家に神実様を祀り、毎月講社祭も勤めていましたが、会長夫妻が来られても、私は挨拶をするだけで、拝むことはしませんでした。それがなぜか、「修養科へ行こう」と言われたとき、素直に「ハイ」と返事をしていました。

それから言葉が少しずつ話せるようになり、杖を使って歩けるまでになりました。医師たちも回復が早いと驚いていました。妻に「不思議だな」と言うと、「素直に修養科へ行くと決めた、その心に親神様が不思議を見せてくださったのです」と言われました。

9月から天理での修養科生活が始まりましたが、毎日ひのきしんと言われて、掃除をする。「ひのきしんと言わないで、掃除と言えばよく分かるのに」と言うと、妻に、「親神様から身体をお借りして、十全の御守護で自由に使わせていただいている。その御恩に報いる感謝の心で、自分の時間と労力をお供えする。それを、日々行う寄進でひのきしんというんです」と言われ、なるほどと思いながらも、よく分からないまま修養科生活を送っていました。

しかし、神様のお話を聞く中で、「かしもの・かりもの」の教理が少しずつ心に治まってきました。今まで妻から「身体は親神様からの借り物ですよ」と言われても、「自分の身体は自分の物だ。好きなように使う」と、話を聞こうともしませんでした。しかし、手足を動かそうと思っても動かない、話そうと思っても思うように話せない。「身体は神様から借りているもので、自分の思い通りにはならない。今まで勝手な心遣いをしていた」と、反省しました。

私の心が変わってきた頃に、妻から、「回廊ひのきしんに行こう」と言われ、二人で感謝の心でひのきしんをしました。

詰所では朝夕おさづけを取次いでいただき、階段の上り下りもでき、杖を使わず歩けるまでに御守護を頂きました。

おつとめは覚えられないと思っていましたが、修養科や詰所の先生方の熱心な指導を頂いて、おつとめができるようになると、右手が肩まで上がり、指も握り拳ができるようになりました。みかぐらうたを唱和するようになると、言葉もスムーズになってきました。

車イスで来た私が、3カ月やっていけるのかと心配しましたが、クラスの仲間や詰所の人たちに助けられ、「感謝・慎み・たすけあい」を身に沁みて感じ、修養科に来て良かったと思っています。

これからは、近隣の人や友人に「かしもの・かりもの」の教理を聞いてもらえるよう、一人でも多くの方におさづけを取り次いで、教祖の道具衆として、教会に必要なようぼくになれるよう、勇んで勤めさせていただきます。

ふうふそろうてひのきしん
これがだいゝちものだねや
（十一下り目　二ツ）

これを、これからお道を歩んでいく上での指針にしたいと思います。

教務部報

教養掛（12月）

教養掛主任
井筒　文夫

教養掛
河合　善洋・松本　優
井筒ちぐさ

教会長資格検定合格
奥　良美（二　名）
瀬戸山眞美（照　南）
立教185年12月17日教会長資格検定講習会第127回を修了し、翌18日検定合格されました。

教人資格講習会第127回修了
洪　善明（真明彰化）
立教185年12月11日

修養科第976期修了
藤原　公子（直　轄）

以西　榮（明　高）
以西キヨ子（明　高）
中場　光栄（芦　玉）
中原トク子（大　玉）
平川　誠一（美和名）
永吉　貴之（大眞永）
堤　俊博（四ツ海）
立教185年12月27日

三日講習会Ⅲ修了

関本　周平（紀　周）
立教185年12月4日

おさづけの理拝戴《11月》

瀧本　早紀（紀　周）
山田　幸代（島　長）
福崎　久男（奄美笠）
森　道治（芦　南）
元見　明（大笠利）
大塚マリ子（尼　崎）
泉岡　恵佳（東大屋）
西窪　美香（東淀川）
宮田　明徳（大関門）
安東浩二郎（太　美）
〈拝戴日順　10名〉

初席《11月》

〈1名〉鳥栖
〈順序運びより　1名〉

■訃報■

有家分教会三代会長（島原部属）佐藤壽信氏（さとうとしのぶ）

令和5年1月4日出直された。85歳。

告別式は、1月7日岩切正教・島原分教会長斎主のもと、長崎県南島原市の葬祭場で執り行われた。

氏は、昭和14年、父・佐藤重雄、母・静子のもと、長崎県南高来郡に生まれ、34年おさづけの理拝戴、41年修養科298期修了、同年教会長資格検定合格、同年教人登録、同年石岡文子と結婚、54年有家分教会三代会長に就任、昭和63年神殿普請。

本部修養科一期講師、大教会では別席推進委員、にをいがけ推進隊員、神殿ふしん部員、少年会芦津団委員などを歴任、修養科教養掛を9度務めた。長崎教区では青年会副委員長、布教部次長、成人講座講師、災救隊副隊長など、永年にわたって多くのご用を担われた。地域でも、有家町青年団長を務めるなど、内に外に多くの功績を残された。

東大屋分教会三代会長（島原部属）八木幹雄氏（やぎみきお）

令和5年1月4日出直された。55歳。

告別式は、1月6日岩切正教・島原分教会長斎主のもと、東大屋分教会で執り行われた。

氏は、昭和43年、父・八木勤、母・小夜子のもと、長崎県南高来郡に生まれ、63年おさづけの理拝戴、平成元年天理教校専修科卒業、同年境内掛勤務、3年少年会本部研修員、4年布教の家石川寮入寮、5年修養科624期修了、同年教人登録、8年上田香織と結婚、20年東大屋分教会三代会長に就任。

教会本部では集会員を務め、長崎教区では、青年会委員長、教区書記、教区主事、南高支部長などを歴任された。

少年会や学生会の活動に熱心に取り組まれ、「こどもおぢばがえり」では毎年多くの子供たちをおぢばへ連れて帰られるなど、若者の丹精に心を配られた。また、地域においても奉仕活動に熱心に取り組むなど、近隣の方からも慕われた。

月例統計（自令和4年1月1日～至令和4年11月30日）

項目／名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	10	11		1
靱（13）	2	1		
東津（23）	2	4	1	1
吉野川（29）	2	2	2	1
島原（16）	6	3	2	
日方（15）	3			1
稗島（7）	2	1		2
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				1
津和（12）		1		
門司（6）	2	2	1	
當別（6）	1	1		
大島（26）	4	5	5	4
沖縄（3）	1	1	3	
尼崎（2）	1	2		
四ツ山（5）	4	1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）		1	1	
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）	1			
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1	4	1	
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）	1			
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	2			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1	1		
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	47	44	16	12